

## □ 中国四川省における大地震災害に 対する国際消防救助隊の活動状況

消防庁国民保護・防災部参事官

### 1 派遣決定から出発まで

平成20年5月12日(月)15時28分頃(現地時間14時28分頃)、中国四川省を震源地とするマグニチュード8.0(中国気象局発表)の大規模な地震が発生、この震災は死者6万9千人以上、負傷者37万4千人以上、行方不明者1万8千人以上(平成20年8月21日現在)の甚大な被害をもたらした。

総務省消防庁では、地震発生を覚知すると直ちに情報収集を開始、国際緊急援助隊の派遣決定を司る外務省国際協力局国際緊急援助室(以下、「外務省」という。)及び実際の派遣オペレーションを行う独立行政法人国際協力機構国際緊急援助隊事務局(以下、「JICA」という。)と緊密に連絡・協議を進めた。

地震翌日の5月13日(火)には、中国側の援助要請は未達ながら、現地の被災状況に鑑み、要請がいつ届いても即時対応できる体制を整えるべく外務省と協議の上、隊員に成田空港への集結を要請した。

しかし、結果的には、この時点で中国側においては、外国からの救援を受け入れる態勢にないことが外務省を通じて伝えられ、

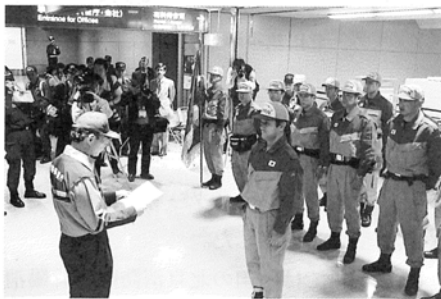
集結途上にあつた隊員に引き返すように要請することとなった。

その後、5月15日(木)、改めて中国政府より援助要請があり、これを受けて日本国政府が国際緊急援助隊救助チームの派遣を決定。その後総務省消防庁も直ちに国際消防救助隊の派遣手続を開始した。同日12時20分、消防庁長官は正式に国際消防救助隊の派遣を決定し、当日の出動第1順位に登録されている東京消防庁、名古屋消防局、川崎市消防局、市川市消防局及び藤沢市消防本部に同日17時00分までに成田空港への集結を要請。集結までの時間が乏しい中、東京消防庁及び名古屋消防局は消防本部所有のヘリコプターを用いて短時間での成田空港集結を果たし、その機動力を発揮した。

成田空港に集結した国際消防救助隊総員17名は、国際緊急援助隊救助チームとなる他のメンバー44名(外務省、JICA、警察庁、海上保安庁等)と合流して国際緊急援助隊結団式を実施した後に国際消防救助隊としての発隊式を行った。

移動便の座席確保が間に合わず、救助チームは第1陣、第2陣に分かれることとな

り、国際消防救助隊第1陣の11名(総務省消防庁1名、東京消防庁5名、名古屋市消防局3名、市川市消防局2名)は同日18時29分北京に向けて出発、翌5月16日(金)13時17分には、第2陣6名(東京消防庁1名、川崎市消防局3名、藤沢市消防本部2名)が四川省の成都に向けて出発した。



国際消防救助隊発隊式



国際緊急援助隊結団式

## 2 被災地での活動

第1陣は北京を経由して現地時間5月16日(金)2時23分に成都空港に到着、中国側警察先導により、広元市青川県へ向けバスにて移動を開始した。約6時間以上の移動の末、中国側から活動サイトとして指示された青川県関庄鎮に到着し活動サイトを確認したところ、同地は地震による土砂崩れ

で村全体が完全に土砂に埋まっている状況であった。

日本の救助チームは都市型搜索救助資機材を重点的に携行しており、隊の規模・能力等を勘案すると、このような大規模土砂災害現場で効果的な救助活動を行うことは極めて困難であることから、直ちに中国側と協議し、中国側の理解を得た後、生存者の存在する可能性の高い同県喬庄鎮へ移動することとした。

約4時間を要して到着した喬庄鎮の現場は、6階建ての病院職員棟が倒壊しており、3名(うち1名は生後2ヵ月の乳児)がその下で救助を求めているとの情報があり、直ちに搜索救助活動を開始した。

救助チームは東京消防庁からの携行資器材である電磁波探査装置(レスキューレーダー)、二酸化炭素探査装置(ライフエクスプローラー)を活用して生体反応を探るとともに、現地で借用した重機(ドラグショベル)で瓦礫を排除しながら徹夜で搜索救助活動を展開した。

翌朝、母子(27歳と2ヵ月)の遺体を発見・収容し、親族に引渡すこととなったが、この時担架に収容した母子の遺体に対して、整列し黙祷を捧げる国際緊急援助隊救助チームの姿は、マスコミを通じて中国内外に報じられ、その厳正な規律と真摯な態度を高く評価する声がその後多く聞かれた。この現場にはもう1名要救助者がいるという情報もあったが、未確認情報である上、実際に生体反応が得られなかったことなどを勘案し、中国側と協議した結果、当該現場での活動を終了し、新たな活動サイトを約300km離れた綿陽市北川県とすることとした。

翌5月17日(土)12時20分に第1陣と第2陣が合流した国際緊急援助隊救助チームは、綿陽市北川県曲山鎮へ向け移動を開始したが、地震による道路状況の悪化と車両渋滞から、現場到着には10時間以上を要することとなった。

同地での活動サイトとなった北川第一中学校の倒壊現場は2棟からなり、教職員が利用する1棟は完全に崩壊状態で、他方もう1棟は1、2階が座屈状態であった。到着したのが深夜であり、投光器等を載せたトラックは悪路の影響で到着が遅れている状況でもあったが、限られた資器材を用いて生体反応を探りながらの現場確認を懸命に実施した。

翌5月18日(日)朝からは本格的な搜索救助活動を実施、活動方針として北川第一中学校を主たる救助活動場所としつつ、部隊の一部を市街地搜索救助にも向かわせた。

座屈した建物の中に多くの生徒が下敷きになった現場である北川第一中学校においては、電磁波探査装置(レスキューレーダー)やエンジンカッター等を活用して搜索救助活動を展開した。



人命探査活動



北川第一中学校の現場

当該現場では中国の北京消防隊、綿陽消防隊等とともに活動を実施したが、この中には日本の消防機関で研修を受けた経験のある指揮官もいたことから、中国側と十分な意思疎通、連携を保ちつつ、救助活動を実施することができた。

同日9時15分に最初の遺体を発見・収容し中国側へ引き渡すこととなったが、残念ながら生存者の救出には至らず、最終的には13名の遺体を発見・収容することとなった。

他方、市街地搜索救助に向かっていた隊は、救助犬等とともに人命探査した結果、生存者の発見には至らなかったものの、1名の遺体を発見・収容した。

翌5月19日(月)は18日と同様、市街地での活動を予定していたが、地震により形成された市内上流にある堰止め湖に決壊の危険があるとの情報を得たため、中国側と協議し、活動を中止することとした。

その後、同日深夜中国側と調整した結果、国際緊急援助隊救助チームは中国国内での搜索救助活動を終了し、5月21日(火)の帰国を決定。この日をもって今回の派遣活動は実質的に終了となった。

### 3 帰国

翌5月20日(火)は、四川省副省長との会談が開かれ、席上、四川省側から国際緊急援助隊救助チームの献身的な活動に対する謝辞が述べられた。5月21日(火)、中国での任務を終えた国際消防救助隊17名をはじめとする国際緊急援助隊は、早朝に成都空港を離陸、8時55分日本に滞在する中国人グループの感謝のメッセージボードが掲げられた成田空港へと無事降りた。

空港で行われた国際緊急援助隊解団式の終了後、国際消防救助隊員は総務省へと移動し、増田寛也総務大臣(当時)に帰国報告。



成田空港へ到着



増田総務大臣へ帰国報告

国際消防救助隊の解隊式では荒木慶司消防庁長官(当時)へ国際消防救助隊連帯旗の返還を行った。

### 4 まとめ

今回の派遣では、強い余震が続く厳しい状況の下で、国際消防救助隊17名をはじめとする国際緊急援助隊は、昼夜を問わず懸命の救出活動に全力を尽くした。残念ながら生存者の救出には至らなかったものの、彼らの献身的な活躍については、北海道洞爺湖サミットに出席するために日本を訪れた中国胡錦濤国家主席から直接感謝の意が示されるなど、日中の友好関係の強化に貢献し、国内外より高い評価を得たところである。